

*薬をせんし 医師の主たる仕事。室町末期の『七十一番職人歌合』

の『医師』の圖中詞に「殿下より 院命・御取成をめされ候、た、

今命はせ候」とあり、医師は薬の 調合・投薬をも行った。八月廿一

日参照。*赤國の川うち 圖

七月廿八日参たいう「アヤ川」

で、現在の慶高道(キョウサン

ト)と全羅道(チヨルラド)の境

を流れる羅津江(ラジンガン)

を指す。*こしやう 聲音から

定されようが、河口の港ではない

ので確定できない。*物をとり

…あへる跡 日本の将兵の略奪

行為。圖「八月四日忠清道ケレン

ト云處三番陣ス。ソノ道六十里。

陸軍捕手ノ擧軍ケレンニ取上。

(中略)下々山谷ニ乱入り。男女

僧俗生捕奈多取来ル。「ケレン」

は全羅道蔚聚。こでは主に「生

捕」であつたと記されている。

『弘中雜錄』八月五日条に「赤弘

等兵、進泊臨陽、金嶽山下露梁等

処、擧出殺掠、公私家尽爲殘蕩」

とする。

*ほむら 炎・焔。転じて心に

燃えたつ怨み、怒り、嫉妬、また

は欲望の意。*城 地名は不詳

であるが、朝鮮式の山城を指す。

*さざり竹の筒 鎖と竹の官柳

(くびき)。捕虜を連行するとき

に用いる。*修羅のちまた 帝

釈天と戦い続ける阿修羅の戦場。

激しい戦品の場所の意。*らん

はこの物 略奪する將兵。↓補

*もつねん 世俗の世界での迷い

心。*罪業深重も…;すてられ

ぬ 出典、『正徳末和讃』↓補

*子共を八からめとり 朝鮮の子

供達を生捕りにする。八月八日、

十一月十九日参照。↓補 *し

てふのわかれ 母子の相別れるさ

ま。『孔子家語』に出典し、御伽

草子『蘭の草子』や謡曲『隅田川』

に用例がある。↓補

に用いられる。↓補

に用いられる。↓補

に用いられる。↓補

に用いられる。↓補

に用いられる。↓補

に用いられる。↓補

に用いられる。↓補

に用いられる。↓補

に用いられる。↓補

に用いられる。↓補

に用いられる。↓補

に用いられる。↓補

に用いられる。↓補

に用いられる。↓補

に用いられる。↓補

に用いられる。↓補

に用いられる。↓補

に用いられる。↓補

くなん。

赤国といへ共やけてたつけふりくろくのほるはむらとそ見る*

同六日二野も山も、*城八申におよはず皆々やきたて、人をうちきり、くさり竹

の筒にてくひをしハリ、おやハ子をなけき子ハ親をたつね、あわれ成る躰、は

しめて三待る也。

野も山も焼たてによふむしやのこゑさなから修羅のちまた成りけり*

同七日二いろく人ことらんはうの物を見てはしくおもひて、わか心ながら

つたなくおもひ、かやうにてハ往生もいか、とおもひ侍りて、

はつかしや見る物ことにはしかりて心すまざるもうねんの身や*

同日にあまりにくわか心をかへり見てつたなくおもひ、され共罪業深重もお

もからず、さんらんほういづもすてられぬ御ちかひなれハ也。

おそらくハ弥陀のちかひをたのますハ此悪心はたれがすくはん

同八日二からうい人子共をハからめとり、おやをはうちきり、一たひとみせず。

たかひのなけきハさなから獄卒のせめ成りと也。

あわれなりしてふのわかれ是かとよおや子のなけき見るにつけても

*とりより 國「取り寄り」近くへ寄ること。ここでは實め寄せのこと。
 *大明人五六万 明の副統兵楊元の指揮する明と朝鮮の連合軍。↑補 *雨かミ 防水用の油紙。*いせ物語の鬼とくちの油紙。
 *伊勢物語 第六段。女と共ににあはら屋に大雨をさけた夜にそこに住む鬼が女を一口で食べてしまつた話で、「鬼一口」として知られている。激しい雨からの連想。
 *同十五日二…… ↑二區 眞補註「同十一日二……」 *しより 國「シヨリ(仕寄)。城を攻めたり討つたりする音が、掩護物として携行する竹とかこれに類する物とかの束」。
 *飛州さまの…… ↑二區 眞補註「同十一日二……」 *同十六日「同十一日二……」 *同十六日二…… 小屋へ。竹中伊豆守赤子誦手ノ高名美嫁アリ」 *城の内の…… 記事はないが、十六日条に生捕があつたことを記している。

いかに有へきとて、夕かたにちかくどりよりたまひ候也。大明人五六万ほどハ籠たるとつたへ候也。
 赤国の城もこたへてありてきけは諸陣よろこひあしをやすむる
 同十四日二よひよりふりしほりたる雨ハ、さなから瀧のおつること也。かり
 そめ二雨かミはかりにて陣屋をふきしかハ、ふり来る事ハおそろしきほど也。
 いねへきやうハなし。いせ物語の鬼とくちもかくやおもひやりて侍る也。
 情なくふりしほりたる雨やおもひとくちをおもひこそやれ
 同十五日二しよりをぬされ、明日の未明にせめて入らんとノ事也。石かきのき
 わへひたとより、はや夕暮に成りにけれハ諸陣よりはなつ鉄砲半旨に、おもひ
 よらぬ人のミしてうせにけれは、かくなん。
 城よりもはなつてつほ半きうにおもひよらすの人ぞ死にける
 さても其よひのまにせめくつしけり。飛州さまの手の衆一番人にて、御保美の
 御朱印申二およはす候。
 *同十六日二城の内の人数男女残りなくうちすて、いけ取物ハなし。され共少々
 とりかへして有る人も侍りき。

*山田才介 不詳。日向国佐原(ごどはら)城主山田有信のこと
 カ。本書本多論文参照。 *御同行 信心を同じくする念仏者で、真宗門徒を指す。 *良久 ややひさしく読む禱語。 *同十日二…… 國「八月十日誦軍カレンヲ立」 *菅屋 ↑菅原註「とま屋」 *奥陣の御供 朝鮮内陸へ侵略する太田一吉に慶念も従軍。↑補 *同十一日二…… 國ではこの日に南原城近辺に達したとする。以下の記事にも異同がある。↑補 *同十二日二…… 國ではこの日に南原城外に布陣。↑二區 眞補註「同十一日二……」 *なんもん 慶高道の南原(ナモング)。 *高山 南原東方の智異山(チリサン)。↑補 *死出の山 死後に越えて行かなければならない山。また地獄にある険しい山。 *ない川 寒の川の誤記カ。
 *同十三日二…… 國ではこの日から十五日にかけて城近くへ陣を寄せている。↑二區 眞補註「同十一日二……」

おそろしやしての山ともい、つへし雲にそひゆるミねをこそゆけ
 *同十三日二なんもんの城五里はかりこなたへ御ちんをぬされ候。此城落行てハ(カ部)
 るへきやうハ侍らさりし也。
 るに身のけ立、死出の山(ひま)ない川の津ともいへし。人の足も馬ひつめもたまた
 てどかりたる事剣のごとし。こゝに又おそろしき瀧有り。此たきハさなから見
 *同十二日二なんもんへこし行ける高山ハ、日本にてもいまた見す。石ハ大にし
 あさましや五こくのたくひ焼する煙のあとに一夜ふしけり
 *同十一日二夕暮て人家の煙の立を見れハ、萬の五こくのたくひ財宝を焼うしな
 いて、
 此ほどの海士のとま屋をたちいて、のりうつりける駒の足なミ
 る也。
 *同十日二船よりあかり四十日におよひし菅屋を出て、駒に乗り奥陣の御供申侍
 幾としをへたて来てにける友人にけふあひ見つる言の葉のすま
 いめんせす候へハ、夜もすからうれしき事つくしかたくて也。
 *同九日二日向国佐原の山田才介殿に参芸申。さても御同行と申。良久た

*有為輕妾 世の中の理象の、つらいやすくはないこと。
 *無常の煙 人間の命のはかなさの譬。 *同十八日二……(例) 臣常道ノ府中宣州城也。朝鮮人堅固ニ持タリト聞ク。則諸將宣州ヲ攻メシトテ。十八日南原ヲ出陣シ。其道十四里ヲ一日ニ棄テ付。忠清道(チュエンチュン) 宣州(ソングン)は説記で全羅道(ソララド)全州(チュオンジュン)ヨルラド)全州(チュオンジュン) *死人いさのことし ↑ 補 *同十九日早旦 宣州ノ城ニ押寄ル処ニ。南原京城ノ威風ヲ聞。十七日宣州ノ城主城内宿城ヲ自燒シ。帝都ニ引入ト云々。この宣州も全州。 * 赤國の府中 全羅道の全州。 * 二に……還留有りて 圖「妾二十日還留シ。諸將ヲ以テ城ヲ毀也」 * 京よりの御つかい番 秀吉の使者。人物不明。 ↓ 補 * 引陣の踐合 撤退の軍議。 ↑ 補 * ミヤゴ朝鮮の首都漢城(ハンゴン)。 ↓ 臣真補註「引陣の談合」

*報恩の御いとなミ 真宗門徒の實踐としての仏恩報謝の格名念仏。 軽じて念仏の法套をいう。ここで、頭如お速夜の法套を指す。 * 廣大のそのおんとく 出典 * 正徳和禮五ノ再左阿弥陀仏の廻向の 恩徳廣大不思議にて 往相廻向の利益には 還相廻向に廻入せり。 * かたく袖衣の袖の片一方だけを敷いて寝ること。一人袋をいう。 * 都 朝鮮の首都漢城。

人ことにわつらいつる、やもうをばわか身ひとつのなけきとぞ成る

同廿二日二さても過し夜ハふる里の人あるひハ旧妻その有さまをこまくと夢

にミつるなり。いかさま今一たびハ帰朝せんとおもふ一念により、かやうに侍

ららん。

今一と帰らんとおもふねんくわんにまよふ心の夢と成るかな

同廿三日二さても一今夜ハわか国にあらんにハ報恩の御いとなミ申候ハん物

を、情なくかやうの所にてあさまして、かやうニ申候也。

* 廣大のそのおんとく の夕へなりあふく心もおろかならずや

同廿四日二明日にて御座候へハ、此小屋の下にてハいかとなき申計也。さ

りなからも信決定のうへなれハ、内心のよここひ也。

おんどくをほうしてつくる事ハなした、信心そよとおしへ成りけり

同廿五日二秋ノヨなかし夜なりければ、いと、古郷のしのはしさのま、に、ね

もやらねはうらめし。おもひのあまりニ、

なかき夜の秋のね覚もうらめしやかたく袖も露と涙に

同廿六日二かやうのうらめしき旅なりとも都に参候ハんハ、うれしがるべき也。

廻申かたおし。あまりのくるしさに、かくて、

同廿一日、なんもんにての手おひおくて、方々より棄こひ候事ハ隙なし。見

爰はまた府中なりけり赤國の所からなるすまひとぞ見る

有りつれ共、寒天二成り候へハ、はや是より道をばけて御動有らんとの事也。

御つかい番にたいめんなされて引陣の談合、是までにミヤゴまで御入候ハんと

同廿日二赤國の府中に付たまふ也。こゝに三日あまりハ還留有りて、京よりの

けふハまたしらぬ所のおき家にひとよをあかす事をしそおもふ

同十九日、此所も城かまへの家躰と見へたれ共、山野へにけ入ける也。

なんもんのしろをたち出見てあれハめもあてられぬふせい成りけり

このことし。めもあてられぬ気色也。

同十八日二輿へ陣かへ也。夜明て城の外を見て侍れハ、道のほとりの死人いさ

たれも見よ人のうへとハいひかたしけふをかきりの命なりけり

無常の煙と成りし也。よそにヤハある。

同十七日二きのふまでハしすへき事もしらす、けふハ有為輕妾のなになれハ、

むさんやな知らぬうき世のならひとて男女老少死してうせけり

此うきを^ミやこのたひとおもひなはさこそうれしくかきりあらしな

同廿七日かたしけなきおたやにて候へハ、小屋のうちにて恩のひの御よろこひ

候也。

しん実のちしきにあふハまれそかしおしへにもれはもとの火宅に

さて又此陣所にて各々御集会有りて、船戸のやうに御出候ハんどのしゆひやう

あひすミ、諸軍もよろこひ申候也。

唄らんとおもふ心のよるこひは飛たつばかりうれしかりける

同廿八日二夜半よりして此陣引やふりて、おを国へ手つかいなり。さてもく

御明日なれ共、御よろこひも申かたくて也。

永々としつミはつへき身なれともみちひきたまふみかけ成りける

ざる程に此府中を立て行進すから、路次も山野も男女のきらいなくきりすてた

るハ、一目共見るへきやうハなき也。

道すからきられてしする人のさま五妹につ、くところなきかな

同廿九日二爰ハまた宿陣ハなし。野にも山にも露にしほれて一夜を明しける也。

野陣とてならわぬ旅にいつとなく露にぬれつ、袖しほるなり

二は、西方淨土を念頭におく

上補 *おたや 親鸞命日のお速

夜。上三頁頭註「おたや」*し

必要のちしき 出典、「高僧和讃」

一〇九「真の知識にあることは

かたきかなかになをかたし」。

*火宅 この世が、もえさがる須

極の火にせまられ、苦しみに満ち

た世界であることを、火災にあつ

て焼けている家に譬えた言葉。上

補 *各々御集會 各軍の軍議。

上六頁頭註「引陣の談合」*船

戸 船門または舷。前者は港、後

者の道の分岐点を意味する。ここ

での用例はいずれであるか判然と

しないが、十一月八日条に騎山を

指して「船戸に今日八御つき」と

あるので、港の意と考える。

*あを国 忠清道（チヨンジョン

ド）。*手つかい 手遣 配下

の者を遣わすこと。転じて出陣す

ること。*みかけ 御陰 仏相

の導きのおかけの意。上補 *此

二…… 圖「廿九日宣州ヲ立テセ

ンクント云所ニ着陣ス。其道九

里」セソクン」は未詳。

*九月一日…… 圖「九月朔日セ

ンクンヲ出テ野ヲ押ケルニ。向

ラ見ルハ、二三里ニ引ハエ真黒ニ

備ノ体ミユル。(中略)其日クン

サンニ着ス。此道九里。今日既二

川水ニ氷ハリ初タリ」。「クンサ

シ」は銅州。*立花 圖「タテ

バナ(立花)ある器物に挿した

花」。仏前に供える花。*わか

宿 豊後臼杵の自坊、安養寺のこ

と。*れいならず 不例。病氣

のこ。*むしけ 虫氣。腹痛。

*どくたち 毒絶。病氣の折、身

体の害となつたり、薬効の妨げと

なる飲食物を避けること。*同

三百二…… 圖によると、九月三

日から四日にかけてクンサンへ錦

山近郊の山岳地帯で激しい戦闘

があった。上補 *同四日二……

圖三日条に「其日チンソント云所

ニ陣ス。其道六里。此二日逗留

シ。昨日ノ手負人ノ看病ス。

*おびたくしげなる 程度、數量

が度をこえてはなはだしいさま。

*なくさき^ミ所 國「ナグサキ(慰

み)。氣喘らし(瘰癧)」。それに

関連する施設カ。*ふひん 不

便。不都合なきさま。*くわん

朝鮮日々記(九月)

青国(國カ)のくわんといへるを見てあれはさもありけなるすまみとぞ見る

くら、色々のなくさき^ミ所、まことにふひんなりし事也。

同四日二青国(國カ)のうちの屋作を見テあれハ、おびたくしげなる家躰也。五こくの

赤国を見はてたまひてあを国へおしてゆかる、道のとをさよ

一夜をあかしけるとかや。

候に、人の精も馬のひつめもたまらずはしりけり。くたひれはて大木のもとに

同三日二青国へとおしてゆかる、道のとおき事ハ、一日二十四五里ほと御こし

殿さまハ御むしけとてれいならすからきくすりをのそみたまへる

と見申て、た、御とくたちにきわまる由候也。

同二日二殿さまハれいならす御むしけとて御食事もす、ます。いか、と御脈な

わか宿のそたておきつる菊のはな色香いかにとおもひこそやれ

くなん。

にも申、又ハそたておきつる物をとおもひ、ふる郷の事をのミなけき候て、か

九月一日、けふハはや九月に入てあるよ。さても今日よりハ菊をあひして立花

同五日二明日の御陣ハりとふれければ、此所ハよし有る所なれハ、夫丸も馬